

採 蓮

Siren

第十五号

No.15

事業報告 所蔵品データベースを使った鑑賞授業の試み

山根 佳奈

一、はじめに

美術館と学校の連携については、全国の館がそれぞれの地域の実情に沿って工夫をこらしており、展示室でのグループ鑑賞から、出前授業、中学生による展覧会作りにいたるまで、近年様々な報告がなされている。本稿では、千葉市美術館と市内の中学校が共同で取り組んだインターネット経由で教室からアクセスできる所蔵品データベース(画像付き所蔵品検索システム)の活用例を報告したい。データベースあるいはそれに類似する作品紹介ツールは、全国でその公開と活用が進められてきた。複数館を横断しての検索システムや、共通のフォーマットを作り出そうという試みも見られ、一般利用者から研究者にいたるまで幅広い層の利益となる情報の共有化が進められようとしている^{註1}。こういった動きの背景には、業務の効率化だけでなく、美術館・博物館の収蔵品に関するデータを、管理している個々の学芸員だけが分かれば良い(＝担当者が居ないとも何も分らない)というこれまでの状況から館全体の業務の中に組織的に位置づけようというように変わり、ひいては広く財産として共有化し、研究や教育のために公開・活用できるようにしようという意識の変化があるといえるだろう。効率的なシステムの構築については、主に美術館・博物館の情報管理活動の分野で盛んに議論がなされているが、本稿は、これらをツールとして教育普及活動の中でどのように活用してゆくか、ということところに主眼を置いて

ている。所蔵品検索システムを研究者ではない一般の利用者が積極的に活用するとしたら、どのようなニーズがあるのか、その掘り起こしにもいずれ取り組みたいと考えている。それによつて、様々な事情により来館が現実的ではない利用者へのアプローチが見えてくるだろう。美術館(歴史・科学系ではない博物館)の場合、画像等の複製の利用については、手放して進められない悩ましい問題もあるが、矛盾を抱えつつも、その活用案を探ってみたいと思う。

なお、本稿は、平成二三年八月四日に開催され、稿者も参加した「第五一回関東甲信越静地区造形教育研究大会」での研究発表^{註2}をふまえて、再度美術館の視点でこの実践を振り返りまとめたものである。発表者の阿部真紀教諭(千葉市立大宮中学校美術科教諭)をはじめ、研究グループの諸先生方、および千葉市教育研究会に、この場を借りてお礼申し上げたい。

二、中学校との連携について

千葉市では、市内の公立小中学校(小学校一一六校、中学校五七校、特別支援学校二校／平成二四年五月現在)の教職員が教科ごとに分かれて参加している授業研究の場「千葉市教育研究会」の「造形部会」の中に、学校と美術館との連携を考えるグループ(以下、「連携グループ」と表記)が発足して八年が経

つ。その経緯については、二〇〇五年度の当館研究紀要^{註3}でも報告したとおりであるが、発足当初から、実際に美術館に足を運んでの活動だけでなく、足を運ぶなくても教室でできることを模索してきた。それは、当市ではアクセスの難しさを理由に美術館活用の一步が踏み出せない中学校が依然として多いためである。

職員が意欲的で立地等の条件にも恵まれた学校は、美術館との連携を単独で進めて行けば良い。だが、有志ではなく公式の授業研究・情報交換の場として、市教育研究会^{註4}に位置づけられたこのグループの役割は、自分たちの経験（実験）を市内全体で共有化することにある。美術館の活用方法、授業プログラム（実験）を開発にあたっては、連携グループはその基本となるシステムと実践例を用意する。ここでは、取り組みやすく応用の利く、わかりやすい提案であることが求められている。

今回報告する「所蔵品データベースを使った鑑賞授業の試み」は、連携グループが取り組んだ過去の鑑賞授業の実践^{註5}をふまえたプログラムの提案とその成果である。本稿のタイトルには、「鑑賞」授業という言葉が登場する。美術館とその所蔵品・資料を活用する場合、必ずしも「鑑賞」にこだわることはないと思うが、カリキュラムの中で保障されている「鑑賞」授業の中で、できることはもつとあるのではないだろうか。実際の作品を前に、複製からは得られない、作品そのものにある物質としての豊かさ、つまり、微妙な色彩、テクスチャー等を味わうという「鑑賞」体験を教室で求めることはできない。むしろ、教室での複製を利用した「鑑賞」では、「良さ」といった感覚的なものを中途半端に求めるのではなく、意識的に観ること、視覚情報を整理して、それを次の鑑賞活動へとつなげてゆくことの方が有効ではないかと思われる。また、稿者は年間二〇件を超える学校団体の来館と作品鑑賞に立ち会っているが、多くの場合、子どもたちは制作者の立場から鑑賞に取り組んでいる（その

ように指導されている）ように見受けられる。作品鑑賞の体験が、子ども自身の作品制作に影響を与え、表現の幅を広げることは確かに結果として評価すべきだが、「鑑賞」教育の本来の目的はもつと他のところにあるのではないか。

展示室や教室での鑑賞教育がここまで普及したことについて、対話型鑑賞法が果たした役割は大きい。コミュニケーションスキルの向上や言語活動という意味で、この手法が高く評価され、美術や作品に関する知識を持たなくても誰もが取り組めるメソッドとして広まった。その一方で、作品にまつわる歴史や固有の情報を伝えることについては消極的な声が多い。鑑賞能力の向上は、鑑賞者の他の学習分野への意欲や関心も引き出す。主体的な鑑賞者を育てることは、美術館鑑賞教育の究極の目標であり、『対話による鑑賞教育 中学校美術教師のための実践ガイドブック』の中で上野行一氏も述べているように、そのための手法として対話型鑑賞が有効なことに変わりはない^{註6}。ここでも述べられているように^{註7}、対話型鑑賞に知識が不要であるとの見方は全くの誤解である。ことに中学生の場合、言語活動のみに特化してしまうのはもったいない。対話型鑑賞の良い部分を生かしつつ、作品への迫り方を中学生にふさわしく深めてゆくことはできないだろうか。作品をわずらわしい文脈から切り離し、鑑賞者自身が意味を読み取り新しい価値を創造することは重要だが、造形的な意味に加えてとりわけ資料的価値の高い美術作品（たとえば浮世絵）については、そのアプローチではたどり着けないものも多い。視覚資料を読み解く楽しみに加え、鑑賞作品の周囲に無数の関連作品があることを知り、芋づる式に関心の幅を広げてゆく楽しさ、またそれらの情報を整理する作業は、発達段階に従って適切に導入されれば、鑑賞能力の向上を促すことができるのではないだろうか。

市教育研究会中学校造形部会に置かれた連携グループのこれまでの研究課題

は、一貫して、美術館と中学校との「通常ベースの」連携であった^{註8}。特別な機会、特別な予算を組むのではなく、通常業務・授業の中であるものを最大限生かしてだけのことができるのかを探ってきた。コレクションの性質と展示スペースの都合から、いわゆる「常設」展示を行わず、所蔵品はテーマ展示（所蔵作品展）というかたちで公開し、一、二ヶ月の会期ごとに展示内容がすべて入れ替わってしまう当館のコレクションを継続的に活用するためには、展示室の特定の作品を取り上げて取り組むプログラムは不向きである。とはいえ、企画展への来館を促す事業が少しずつ定着してきた今、コレクションへの理解と愛着をどのように育ててゆくかという長年の課題にも、そろそろ向き合うべきだろう。

今回は浮世絵データベース試行のタイミングにあわせての研究となったが、鑑賞授業の題材に浮世絵を取り上げたのはデータベースがあるという理由だけではない。浮世絵は中学生が授業その他の場面で接したことがあるものであり、今後も何らかの場面で接する可能性の高いものだということ、それ以上に、様式・歴史的背景の理解が確実に作品理解を深めるであろうこと、原則として様式・約束事の上に成り立つ作品であり、得た知識の他作品への応用が期待できること、さらには、美術鑑賞以外の分野に興味を広げてゆける題材であることを重視した。

当館では、別途送迎バスを使つた小中学生の団体鑑賞プログラムを用意しているが、この事業での鑑賞も規模の大きい企画展会場が中心になる。この事業は中学校にはなかなか利用しづらいという現実^{註9}に加え、鑑賞プログラム（小学生向けのものを応用）の物足りなさ・もどかしさを感じるようになり、中学生を対象とした鑑賞プログラム、作品への効果的な迫り方の開発が求められていた。今回の連携授業では、残念ながら展示室での浮世絵作品鑑賞こそ叶わなかったが、中学生が段階を追って作品をより深く観てゆく過程を目の当たり

にし、適切な知識、視点・切り口の設定が鑑賞者の興味関心を促すものとして有効であると確認できたことは、今後の参考になるだろう。

三、所蔵品データベースの教育普及活動での利用について

所蔵品のデータベース（本稿では、電子化され検索機能を持つものに限る）については、近年整備が進み、その重要性和技術的な成果については、研究会等の場でさかんに議論と情報交換が行われているようである。所蔵品データベースの目的は大まかに二つあるといえるだろう。一つは、収集資料（作品）の管理という、博物館（美術館を含む）の機能を支えるものである。収集・保存・展示の各活動に直結するものと言ってよい。館内業務の効率化には不可欠で、コレクション形成に先立ちシステムを構築する場合もあれば、紙ベースの登録作業から移行をはかる場合もある。もう一つは、情報公開のためのツールであり、これは広報に加えて教育普及的な活用に特化されたものといえるだろう。

データベースのあり方について、二〇〇五年と二〇〇九年から二〇一一年にかけて国内の美術館ホームページの状況調査を行った国立新美術館の室屋泰三氏は、それらを「紹介」型・「リスト」型・「検索」型の三つに分類している^{註10}。「紹介」型の場合、いわゆる「優品」をピックアップし、キャプションデータ相当の作品情報を備えつつ、鮮明な画像とともに解説文によって作品の魅力が紹介される。疑似鑑賞ともなるため、「鑑賞の続きは本物を美術館で」といったコメントが添えられる場合もある。「紹介」型データベースは規模の大小はあつても導入している館は多いようだ。スマートフォンアプリとして公開されている国立西洋美術館の“Touch the Museum”^{註11}などは、最新メディアを駆使した紹介型の典型であろう。「リスト」型は、所蔵作品の情報をた

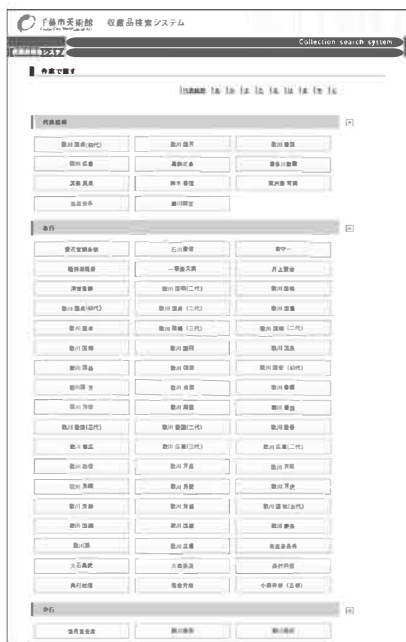
たとえば収蔵年度ごとにリスト化したものとされ^{註12}、むしろ館内作業での実用性を重視していると思われる。他方、キーワード入力による「検索」型の場合、使い方は検索者の関心に委ねられている部分が大きい。ちなみに当館の場合、ホームページ上の先行する「紹介」型に加えるかたちで、同ページ内(末尾)に作品の一部を対象としたデータベースが追加された。このデータベースは、「検索」型を指しつつ現段階では未完である。東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館の横断検索システムである、独立行政法人国立美術館「所蔵作品総合目録検索システム」^{註13}は、「検索」型の典型といえるだろう。トップページは画像の無いシンプルなデザインで、ジャンル・作品題名・作家名・作家名読み・制作年代・複合からなる検索方法が用意されている。東京藝術大学は、膨大なコレクション約二八、〇〇〇件のうち二六、二五七件の作品情報、一一、九八〇点の画像を試験的に公開している^{註14}。東京国立博物館のデータベースは、複数レベルに分かれており、中でも「名品ギャラリー」^{註15}は所蔵品の中から「優品」約六〇〇件のデータを閲覧でき、作品紹介ページに近い。同様に、国宝・重要文化財を対象とした国立文化財機構によるデータベース「e国宝」^{註16}も公開されている。もちろん画像は学校利用等も可能である^{註17}。これとは別に同博物館のサイトには画像検索のページがあり、約七九、〇〇〇点(二〇一一年一月現在)の文化財画像を見ることができる。この画像データベースは調査・研究の項目内に位置づけられ、他の研究データベースとともに「その先へ」と興味をつなげてゆくための手がかりを利用者に与えている。以上、ここに例を挙げたのはいずれも組織の大きなところであり、現実的には、中規模以下の施設が所蔵品すべてを網羅的にデータベース化し、一般の利用に耐えるシステムにして公開するのは難しい。上記事例も、既存の館内用データベースを転用したり、助成金の獲得や外部組織との共同開発などによって実現したものである^{註18}。

データベースを利用した鑑賞授業を可能にするためには、インターネットからのアクセスが可能なのもちろんのこと、一般利用者に使いやすい検索システム、画像があること、その画像がある程度の拡大に耐えることが最低条件であろう。一方、教室環境については、インターネットに接続できるパソコンの整備と全員で一つの画面を見ることが出来るモニターの確保が望ましい。千葉市の中学校には、二〇〇九年度より地デジ対応の液晶・プラズマ大型テレビが各教室に配置されており、画像や映像を使った授業に利用できる環境が整っている。なお、教室でのプロジェクターによるスクリーン投影は望ましくない。備え付けのスクリーンの場合、ゆがみや傾斜による色飛びに加え、暗幕をひいてもなかなか暗い空間が作れず、劣悪な鑑賞環境となる。これは以前、連携グループが授業案を用意して市内ほぼ全ての中学校で取り組んだ授業の際に大きな問題となった。

また、前提として、美術館の所蔵品には偏りがあるということを、教材として活用する場合は理解しておくべきである。コレクションの特徴を理解し、それを積極的に生かす工夫が必要だろう。

四、千葉市美術館「浮世絵データベース」について

「浮世絵データベース」(正式には、「千葉市美術館所蔵品検索システム」)。管理用データベースに登録された所蔵作品九、〇〇〇点弱^{註19}のうち、コレクション方針二の「近世・近代の日本絵画と版画」の中から、インターネット上で浮世絵作品の検索ができる。以下、「浮世絵データベース」と表記。<http://www.ccmn-net.jp/search/index.html>は、当館の所蔵品の一部を外部から検索



できるサービスとして、平成二三年度よりホームページ上でパイロット版が公開された【図1】。所蔵品の中から代表的なものを何点か紹介するページはすでに存在しており、今回あらたに公開されたものは、より積極的な美術館利用者が当館のコレクションの内容を調べるための手段として想定されている。浮世絵データベースの整備は、当館が平成二二年九月から翌年二月末までの間、空調設備工事のため展示室、貸出施設、美術図書室等を休室していた間の事業として行われた。既存の作品管理のための館内用データベースを公開用に整備することになったが、もとになったデータベースは、平成五年に整備開始、平成六年に導入されたもので、当館オリジナルのシステムとして構築されたものである。版本を除く浮世絵作品が今回公開対象とされたのは、当館のコレクションのうち比較的まとまりのある分野で、かつ、著作権問題がクリアされているからである。先行するデータベースにはもともと画像の項目が設けられていたが、コレクションに新しい作品が加わるたびに情報は順次追加登録されてきたにもかかわらず、ほとんどの作品に画像が添付されてこなかった。そこで、

データベースの公開に備えて、すでにある写真(ポジ)をスキャンしてはめ込む作業が進められた。適当なポジの無いものについては新規に撮影した。画像のサイズは、検索・閲覧に支障が出るほど重すぎず、かつ、拡大できるサイズとして、一〇二MBに設定した。総数二、一二一件のうち、現在画像があるものは一、五九六件(約七五%)だが、将来的には全点画像付きデータベースとしての整備をめざしており、学校等を含む教育・研究目的の利用にこたえるものとなしたい。なお、パイロット版の公開以降、平成二四年度に予定されている企画展にあわせて、溪斎英泉の画像のみまとめて追加された。

「浮世絵データベース」は、当館トップページ(<http://www.occm-net.jp/>)の「所蔵作品」の項目から「近世・近代の日本絵画・版画」を選択すると、その一番下にリンク先が掲載されている。千葉市美術館の所蔵品のうち、版本を除く浮世絵のみを検索することができる。「作家で探す」「条件を入力して探す」の二つの方法があり、「作家で探す」を選択すると、代表絵師一人を筆頭に、



図 4



図 5

その下にあいうえお順で絵師一七八人が並ぶ【図2】。「作家無し」の項もある。作家名を選択すると、画像(ある場合のみ)とともに作品名・作家名/作家名読み・分類が表示される。画像一覧のみの表示(二画面に二〇件)に切り替えることもできる【図3・図4】。一方、条件を入力して探す方法では、作品名・作家名・分類のいずれかをヒントに検索することができる。分類は、肉筆・版画・その他の三つに分かれている【図5】。

実際には、一般利用を想定したデータベースとしては、まだまだ不十分といえるだろう。後に紹介する連携グループからの要望を見るまでもなく、キーワード検索の充実や画像の整備など、今後の課題は多い。

五、浮世絵データベースを使った授業

連携グループが平成二二年度の課題として取り組んだ「浮世絵データベース」を使った授業は、最終的には「美術館と学校が連携して、作品のよさや美しさを鑑賞させる授業の創造」浮世絵を読み解く面白さを知る鑑賞を通して「〜というテーマでまとめられ、新潟での研究発表に臨むこととなった。ここでもまとめられているように、取り組みの中心となる作業には、資料・情報に基づく作品の「読み解き」が置かれている。画中に手がかりを求め、それらの読み解きを通して、作品を味わおうというものである。また、データベースの特徴を生かし、一点の鑑賞を入口に、作家、主題、制作年代などの類似する作品にも関心が広がってゆくことを期待した。

授業は、導入部分として、「浮世絵とは何か」を学ぶところから始められた。表現や技法といった造形的価値だけに基づく鑑賞ではなく、浮世絵というジャンルの中身やその機能、同時代に果たしていた役割等をふまえた上で、個々の作品に迫ろうというものである。鑑賞者にあわせて、「鑑賞の入口・切り口をどこに設けるか」は、効果的な鑑賞教育の鍵となるものだ。今回は、浮世絵鑑賞の手がかりは美術館が用意した。一般来館者向けのギャラリートークなどで押さえる基本的なポイントを紹介し、所蔵する図書資料の中から今回の授業の目的にかなうと思われる浮世絵鑑賞の入門書を複数選んで資料として提供した。それらをふまえて、今度は教師側が授業で活用できそうな部分を選び、中学生の関心に引き寄せ、彼らが理解できる・興味を持てる言葉と形式を選んでプレゼンテーション資料を作成した。資料の作成は、授業者だけでなく、連携グループに所属する教師が協力して行った。

今回の授業は、二つの研究仮説に基づき実施された。①データベースを利用して多くの作品に触れることにより、千葉市美術館や浮世絵に興味を持つこと

ができるであろう。②浮世絵についての知識を持つて鑑賞することで、読み解くおもしろさに気づくであろう。①に関しては、特定の作家の作品を点ではなく複数比較することで、表現上の特徴や様式を整理しながら観てゆくことと、それによる気づきが期待された。②に関しては、中学生ならではの課題として、視点の設定と知識がどの程度有効なのか、関心が寄せられた。

なお、実際に授業で利用したデータベースは、平成二二年度当時のものである。この授業はデータベース(パイロット版)のモニタリングとしても位置づけられた。

授業者による実践に先立ち、連携グループ内で授業内容を検討し、授業を行う教諭が四時間分の指導案にまとめた。以下、授業の流れを簡単に追ってゆく。

一時間目 浮世絵とはどんなものであるか知る。

二時間目 美術館所蔵の浮世絵の中から一点紹介したい作品を選ぶ。

三時間目 選んだ作品の作者について調べ、作品について感じたことをまとめる。

四時間目 班で決めて調べた作品を発表する。

(1)鑑賞の前段階「浮世絵とは何か?」／一時間目

——作品が生徒にあまり馴染みのない「浮世絵」のため、事前に「浮世絵とは何か」「どのような種類があるか」「浮世絵の果たした役割は」など、鑑賞の切り口、入口になるような学習をし、それをふまえたうえで作品選びができるようにした。このことによって、生徒が浮世絵に関する知識を深め、作品から情報を読み取り鑑賞していけば、より深い学習ができるのではないかと考えた^{註20}。

この仮説に基づき、初回の授業は用意された。浮世絵について学習するプレゼンテーション資料の作成には、連携グループ内で作業分担をし、必要に応じて自校の生徒で実験をしながら改良を重ねている。今回の授業者である阿部教諭の授業は、中学校三年生を対象に行われた。美術の時間を計四時間使う予定だったが、結局は六時間かかった。全体としては、時間がかかりすぎたかもしれない。もっとポイントをおさえて進められれば良かったとの意見も聞かれた。

一時間目は、連携グループで事前に用意したプレゼンテーション資料「浮世絵—江戸時代のマルチメディア」(パワーポイント)を用いて教師が説明をした。ここではまず、浮世絵は美術館のガラスケースや額の中に飾られている江戸時代の絵ではないとし、市井の人々が暮らしを楽しんだり、情報を得るためのものであったことを紹介した。さらには、ジャンルとして、美人画・役者絵・武者絵・相撲絵・死絵・化物絵・おもちゃ絵などがあることを示した。これらのジャンル紹介には、当然ながら、当館のコレクションの特徴が影響している。その後、五〜六人ごとに班を作り、鑑賞する作家(絵師)を振り分けた。実際にグループで活動する前に、一人一人が気に入った作品を選び、その際、その作品が浮世絵としてどのような働きをしていたのかを考えさせた。

(2)個人とグループの鑑賞／二時間目

一クラス二九人を六グループ(五人ずつ)に分けた。鑑賞対象は、あらかじめデータベースの「代表絵師」^(註21)の中から六人を選び各グループに割り当てた。六人の選定基準として、検索対象となるデータベース上の作品数や資料の多寡になるべく偏りが出ないよう配慮した。たとえば、溪斎英泉二八四点など、例外的に点数が多いものは除いた。美術館の所蔵の範囲内での選択となるため、

必然的に、世間一般の知名度や出版資料の多寡とはやや異なってくる。

グループごとの割り当ては次のとおり。

グループ一 喜多川歌麿(一五点)、グループ二 鈴木春信(一五点/版本を除く)、グループ三 歌川国貞(二七点/当時)、グループ四 葛飾北斎(五〇点)、グループ五 歌川国芳(三二点/当時)、グループ六 歌川豊国(二〇点)

* (一)内は画像付きの作品点数

まずは所属するグループに割り当てられた絵師の作品の中から五人(もしくは四人)が一点ずつ自分が紹介したい作品を選ぶ。次に、五点ないしは四点持ち寄った中から、グループ全体で紹介する作品を一点選ぶ。話し合い、グループ内でプレゼンテーションをして決定する。

今回の授業に参加した生徒たちは、二年次・三年次の夏休みに、それぞれ課題として美術館へ足を運んでいる。また、二年次には、千葉市美術館の所蔵品の中から九〇点あまりの作品を使った鑑賞授業に取り組んでいる^(註22)。この鑑賞授業は二年生向けの内容で、初回の成果をもとに授業者自身の手によって改良されたと思われる。美術への関心・意欲・態度として、「作品の良さや美しさを鑑賞する喜びを味わうこと」「地域的美術館の所蔵作品を鑑賞することで、郷土の美術や文化に対する理解と愛情を深めること」といったねらいに加え、鑑賞の能力、つまり、「グループでの鑑賞を通して、自分の考えを発表したり、自分の価値意識をもって批評したりすることで、作品から受ける印象を感じ取ったり思考すること」を身につけることを目標としていた。二年次のこのような体験が、今回の授業の前半部分(自分の意見とグループ内の意見の違いを受け入れつつ、調整しまとめてゆく作業)で役に立ったようである。

(3)選んだ作品について調べ、作品について感じたことをまとめる/三時間目(実際には、三、四時間目)

なぜその作品を選んだのか、面白さ、興味を持った理由を探ってゆく作業である。ワークシートを利用しながらすすめられた。割り当てられた作家については、一つの作品に絞らず、データベース上で他の作品と比較しながら鑑賞する。それによって、共通点や特徴などがあらわになる。さらには同じ主題を他の作家がどのように表現したか、データベース上で比較することもできた。

(4)班で決めた作品を発表する/四時間目(実際には五、六時間目)

プレゼンテーション資料はパワーポイントで作成され、グループごとに教室前方の大型モニターの横に並んで発表した。割り当てられた作家について、選んだ作品を理由とともに紹介した。その際、その作品が同時代社会でどのような意味を持っていたのかを、一時間目の学習に基づき考察した。

六、評価

授業後、参加生徒の感想をとりまとめた授業者からは次のような報告があった^(註23)。

・今までの鑑賞では、生徒各自の「好きと思った」「良いと感じた」といった感覚的なものを手がかりとしていたが、今回、「浮世絵はどういうものか」「どのような働きがあるか」という授業を行ってから鑑賞したので、作品から様々な情報を読み取ることができ、より深い鑑賞ができた。

・浮世絵の働きを知ることにより、浮世絵の見方が変わった、興味を持ったな

どの生徒の感想が多かった。

- ・今回は実際の作品を鑑賞したわけではないが、作品に興味を持ち、今後実物を観る機会があったときにそれが生かされて来ると思われる。
- ・生徒たちの市美術館への親しみが増したようだ。

また、連携グループの中からはデータベースの改良を中心に、次のような意見があがった。

- ・画像の無いものが多い。せめて、画像のあるものと無いものを分けて表示できると良い。
- ・タグ、キーワード検索ができれば良い。「風景」「美人」など。
- ・ふりがなと作品解説を入れてほしい。
- ・図書館くらい使い勝手の良いシステムだと良い。

連携グループ以外からは、次のような意見が寄せられた^(註24)。

- ・作者もテーマもしばれたからこそまでできたと思う。発表の仕方、ワークシートをもう少し整理できたら良いかもしれない。
- ・教材として浮世絵をどう扱えば良いかヒントになった。
- ・難しい言葉、言い回し等、調べて出て来た解説でわからないこと、疑問、発見にぶつかったとき、ひとつずつ解決していったのは良かった。
- ・「浮世絵Ⅱきれいだねだの古い版画」という認識だったが、メディアアとしての役割を知ることができ興味が増した。導入、切り口が良かったと思う。

- ・発表の仕方には工夫と指導の余地がある。
- ・思考のつながり、興味関心の広がりを見せるようなプリントを、はじめて鑑賞に取り組む教師向けに用意したい。

- ・思考力を身につけることができる。

- ・市内のすべての学校で気軽に使えるワークシートがあると良い。
- ・今回の研究授業を通して、参加教員が浮世絵に興味を持てるようになったことも収穫である。

データベースの充実については、今後、画像の順次追加と、既存の作品解説文を入れ込むことを検討している。キーワード検索については、システムの問題があるが、利便性を考えるとこれも検討したい。作家や作品に偏りがあるのは、画集等複製による教材と美術館のコレクションの大きな相違点といえるだろう。ここにあるものが全てではない、という前提は、いずれにしても心にとめておきたいことである。このことは、一般的な美術館のコレクションの特質として利用者の理解を求める必要がある。だが同時に、鑑賞対象作品の幅を狭めることは、鑑賞初心者向けにはある程度必要で、効率的な学習のためにもメリットと考えられるのではないだろうか。

また、作品一点だけではなく、同じ作家や同種の作品を一定量平行して観てゆくことによって、様式や決まりごとを整理しながら観る姿勢が養われる。これは目録(図録)ではなく検索システムを使うこと、データベース活用のメリットといえるだろう。

鑑賞にあたる視点・知識の用意は、美術館では一般向けギャラリートークとして実践しており、その効果も実証されている。ただし、視点や知識の提供は、あくまでも鑑賞対象の作品へと再び目を向けさせるしくみでなければならぬ。このことは、ギャラリートークの課題でもあるが、過分の、あるいは不適切な知識の提供は、鑑賞者を作品から引き離してしまう。作品鑑賞を二の次にした調べ学習にならねないというリスクは常にあるだろう。

稿者の立場としては、あくまでも画像という複製で鑑賞を完結させたくない

というのが本心である。だが、中学生はこれから鑑賞に取り組む年代にあり、今後の鑑賞につながる素地を整えるという意味でも今回のような授業は進めたい。鑑賞能力は発達段階に応じたプログラムを用意して鍛えることで、少しずつ向上し、やがて身につくものではないだろうか。

今後は、実際の展示と連動した授業の進め方や、データベースの活用方法についても考えてゆきたい。

註1 後述の独立行政法人国立美術館「所蔵作品目録検索システム」や、博物館・美術館における資料情報システムと複数の館での情報共有のための基盤として、東京国立博物館が中心となつて二〇〇五年に開発した「ミュージアム資料情報構造化モデル」など。参考文献として、村田良二「東京国立博物館の収蔵品管理システム」『アート・ドキュメンテーション研究』(16)二〇〇九年、p.11-28

註2 発表者 千葉市立大宮中学校阿部真紀教諭。稿者は助言者として登壇した。

註3 山根佳奈「学校との連携事業に関する考察」千葉市美術館での実践をふまえて『千葉市美術館研究紀要採蓮』第八号(二〇〇五年)、p.38-41

註4 全ての教員が何らかの部会に属し、例会は勤務時間内に開催される。

註5 市立中学校の二年生全員を対象とし、千葉市美術館の所蔵作品の中から九〇点あまりを選び、スライド等を用いて画像で鑑賞する授業。市教育研究会を通して市立中学校五七校に呼びかけ、五四校(次年度初めに実施した一校を含む)が参加した。教室で鑑賞する作品は、中学生に親しみやすいテーマや美術館の収集方針をふまえ、画像での鑑賞であることなどの条件を加味して選定(教室ではスライドやカードでの鑑賞を前提としているため、原則として立体作品は除外した)。三つのコレクション分野について、房総ゆかりの作品では「行つてみたい・見てみたい千葉の風景」、近世近代の作品からは「ちよつと昔の美男・美女」、現代美術作品からは「人」をテーマに設定し、点数のバランスも考慮した。

註6 「学習者が主体的に学ぶ授業」――上野行一氏は、対話による鑑賞のねらいを、「美術作品にまつわる歴史や固有の情報を教えるのではなく、作品に対する自分の見方、感じ方や考え方を他者とコミュニケーションし、対話を通して個々の見方や価値意識を深めたり広げたりすること」としている。上野行一著「はじめに 対話による鑑賞の授業がめざすもの」『対話による鑑賞教育中学校美術教師のための実践ガイドブック』、光村図書出版株式会社、二〇一〇年、p.3

註7 同、p.7

註8 今回の事業にいたるまでの、美術館連携グループの八年間の活動内容は次のとおり。
平成一六年度 市教育研究会中学校造形部会内に「美術館との連携グループ」発足

平成一七年度 「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」広がる絵本世界」にあわせて市内六中学校の美術部の生徒が、絵本の制作・展示を通して交流

平成一八年度 国内の美術館と学校の連携事業について、先行事例を調査

平成一九年度 前年度の事例調査をまとめ、市内の美術科教職員向け資料『いつてみたい。美術館』を発行

平成二〇年度 市立中学校の二年生を対象とし、千葉市美術館の所蔵作品の中から九〇点あまりを選び、スライド等を用いて画像で鑑賞する授業を実施

平成二一年度 前年度の鑑賞授業の成果を反映させた所蔵作品展「こんな作品あつたよ」を美術館で実施

平成二二年度 千葉市立大宮中学校にて千葉市美術館の作品検索システム「浮世絵データベース」を利用した鑑賞授業を展開

平成二三年度 「第五一回関東・信越・静地区造形教育研究大会」で研究発表

*調査対象館は一七館。調査・報告はグループメンバー二名が担当。発行「千葉市教育研究会中学校造形部会 美術館連携グループ」平成一九年六月

*会期 平成二一年六月二七日～八月九日

註9 学年規模が大きいにもかかわらず、教員が専科科目を受け持つためクラスごとに分散した来館が難しいということ。

註10 室屋泰三「作品情報の発信とアクセス」『美術情報・資料の活用―展覧会カタログから』まで「全国美術館会議情報・資料研究部会」二〇一一年

註11 事前にiPhoneまたはiPadの端末にダウンロードし、国立西洋美術館の常設展示室で実際の作品を目の前にしながら鑑賞ガイドとして利用するためのアプリケーション。同館は二〇〇七・二〇〇八年度にわたり文化庁から受託して「美術展示物の鑑賞を助ける音声・映像案内の高度化にかかる調査研究」に取り組んでいる。監修「国立西洋美術館 制作」NHKエデュケーション。

註12 前掲書 p.26

註13 <http://search.artmuseum.go.jp/>

註14 <http://db.amgdata.ac.jp/> (公開状況は二〇一二年六月現在)

註15 http://www.tnm.jp/modules/r_collection?controller=top

註16 <http://www.emuseum.jp/>

註17 iPhone版が二〇一一年一月二〇日リリースされた。学校の授業でも活用してほしいとのこと。

註18 二〇一一年二月よりインターネットを通じてサービスが始まったGoogle社(アメリカ)の「Google アートプロジェクト」は、世界各国の美術館の名品・優品を検索し、高解像度画像で閲覧できるものであるが、本稿執筆中の二〇一二年四月より規模が拡大し、新たに日本からも東京国立博物館をはじめとする六館が加わった。外部組織との連携による所蔵品情報の公開の一例として挙げておきたい。
<http://www.googleartproject.com/>

註19 千葉市美術館の所蔵品数は一、七二二件（平成三三年度三月末日現在）であるが、管理用データベースでは点数で登録している。

註20 『第五一回関東甲信越静地区造形教育研究大会』レジュメより、五、実践内容（1）題材について

註21 浮世絵データベース「作家で探す」の項を参照。

註22 鑑賞プログラム「こんな作品あったよ」は、当初平成二〇年度に当時の市立中学校の二年生を対象に一斉授業を実施した。一斉実施以降も授業を行うかどうかは、各教師に委ねられている。

註23 授業で使ったワークシートにアンケートを盛り込み、終了後に生徒から回収し、阿部教諭が集計したもの。

註24 『第五一回関東甲信越静地区造形教育研究大会』研究発表後の質疑応答より抜粋。

Project Report: An Experiment in Teaching Visual Appreciation through the Use of an Art Museum's Collection Database

Kana Yamane

This article reports on a project jointly undertaken by the CCMA and middle schools within Chiba city that experimented with providing classroom access via the Internet to the CCMA Collection Database (system for searching CCMA collection list with visual images). Advances are being made in making museum information, specifically databases or similar tools introducing art works, available to a broad spectrum of end-users, from researchers to the general public. These systems are being developed and organized in a variety of formats, including search engines to access textual data, as well as the viewing of high-resolution images.

Discussions regarding how to create effective systems are flourishing, primarily within the field of museum information systems management. This article focuses on one application and the use of museum information systems in an educational setting.

This particular experiment was a joint research project developed by a team made up of CCMA staff members and middle school art teachers who are part of the Middle Schools Arts Subcommittee working group of the Chiba City Education Research Committee. It utilized the CCMA Ukiyoe Works Database (total 2,121 items, of which 1,596 items have images). Curriculum plans were proposed and student worksheets developed. In my role as a museum educator, I prepared resources explaining art media, materials and formats along with tools for teaching visual appreciation.

When reproductions of art works are used in classrooms as part of visual appreciation training, there is no opportunity for participants to personally experience the actual art work or to truly appreciate the actual materials and their specific qualities. Thus, would it not more meaningful to simply teach the skills for critical art appreciation, namely learning how to learn visually and organize the information they gain in that process, so that participants can carry those skills with them to their next personal encounter with actual art works. Given this premise, the focus of this experiment was placed on learning how to read and interpret an art work on the basis of secondary materials and information. This meant that participants were shown how to find hints within a picture to start their viewing experience and then enjoy the art work through learning how to read and interpret those clues. Using that learned critical appreciation of a first art work, the participant can use the database to expand their field of inquiry to related works, whether in terms of artist, period or subject matter. By observing art works via a single facet, such by the same artist or of the same type, the viewer can learn to organize their thoughts about style and standard ukiyoe iconographic conventions, and thus develop their ability to critically view, understand and appreciate. This method for investigating art works is particularly effective for art works such as ukiyoe prints, which are themselves rich troves of information on a range of subjects.

Once knowledge and a method of looking has been given to viewers, there is no avoiding the fact that then the viewer must turn once again to look at the art work under consideration. If excessive or inappropriate information is given, there is the risk that a viewer will turn away from the art work and it will become simply a case of rote learning or appreciation. However, this experiment confirmed the value of focusing on the process of training middle school students to gradually look more closely and deeply at art works and thus hone their critical abilities. The provision of appropriate knowledge, viewpoint and starting points for their viewing experience was an effective means of encouraging their interest in visual appreciation. Thus this study will contribute important information for the future consideration of this issue.

(Translated by Martha J. McClintock)

千葉市美術館研究紀要
採蓮 第十五号

二〇二二年七月三十一日発行

編集・発行―財団法人千葉市教育振興財団
千葉市美術館

三〇―六七三 千葉市中央区中央三―十一―八
電話〇四三―二二―二三一一(代)

制作―印象社

Bulletin of Chiba City Museum of Art
Siren No.15

July 31, 2012

Edited and Published by
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733 JAPAN
Phone. 043-221-2311

Produced by
Insho-sha

ISSN 1343-148X